寄稿

時代の境目の学年
旧校舎最後の卒業生として

立花　正男（新29回生）

私が岩手高校を卒業し、大学に入学して二、三日たったころ母校の火災のニュースを聞き、急いで自転車で母校に行き無残に焼け落ちた校舎をみて何とも言えない気持ちになったことを思い出します。考えてみれば私達の学年はこの校舎の火災に象徴されるように、古い時代から新しい時代に変わる境目の学年だったように思います。

例を挙げてみると、高校三年生のときに創立五〇周年記念式典が行なわれ、半世紀の母校の歴史を顧みたこと。寮官の先生が戸嶋先生から久保先生に交替になられたのは私が高校二年生の時でした。これもまた一つの時代の終わりだったような気がします。

岩手高校以外に目を向けると、岩手県の公立高校の入試が二日間の日程で行なわれ五〇〇点満点だったのは私たちの学年までで、次の学年からは一日で行ない、三〇〇点満点に変わりました。

また大学入試も国立大学に一期校、二期校がまだありましたが、私たちの二学年下からは共通一次試験が始まりました。

この共通一次試験の実験としてプレ共通一次試験を受けて初めてマークシート式の試験を受け、新しい時代を予感しました。このように、私たちの学年は内外ともに古い時代と新しい時代の境目の学年であったと思っております。

またこの時代社会にも大きな変化のあった年でした。それは日本の政界に激震をあたえたロッキード事件です。

私たちが母校を巣立とうとしている時にあまりにも強烈な印象を与えられ、実社会に飛びこむわれわれは不安だらけだったような気がします。

こんなとき私たちの心の支えになったのが三年間言われ続けた石桜精神でした。母校を卒業し二〇年たった今でも苦しい時などに頭の中に石桜精神ということばを思い出します。時代の変化を多く感じながら、そのたびに石桜精神を大切にし、これからも生活していきたいと思っております。

焼失以前の旧校舎正面玄関